

## 原著論文

# 大学と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が 利用者にもたらす成果 ーグループインタビューによる質的分析ー

田代和子 小坂橋恵美子 平澤マキ 村杉恵子 岡本あゆみ 鶴野澄世 本吉杏奈  
淑徳大学看護栄養学部

## Achievement on users of ‘dementia café’ held by a university and local residents in collaboration/cooperation ー Qualitative analysis by group interview ー

Kazuko Tashiro, Emiko Koitabashi, Maki Hirasawa, Keiko Murasugi  
Ayumi Okamoto, Sumiyo Uno, Anna Motoyoshi  
School of Nursing and Nutrition, Shukutoku University

### 抄録

本研究の目的は、大学と地域住民が連携協働する「認知症カフェ」の開催が利用者にもたらす成果および継続的な運営に向けた課題を明らかにすることである。認知症カフェ継続利用者6名に対しグループインタビューを行った結果、35のコードから11サブカテゴリー、さらに5つのカテゴリーである【認知症の情報や予防の共有ができる場】【学生ボランティアとの異世代間交流を通じた自尊感情の高まり】【安心・安全な地域の居場所】【連携もたらす多彩なプログラム効果】【継続利用を可能にする両者の連携と課題】を生成した。連携協働による成果では、“学ぶ・相談する”については大学がもつ認知症に関する知識の提供ができ、一方で地域の特性を生かした“楽しむ”を主としたアクティビティの提供により、両者のもつ利点を結集できたことが利用者のニーズと合致し、成果へと繋がった。また、学生ボランティアの接待や傾聴を通じた異世代間交流は利用者の自尊感情の高まりに繋がり高評価を得た。利用の継続要因として、開催地との関連が示された。高齢者にとって徒歩圏内にある場は重要であり、利便性がある安心・安全な地域の居場所であったことが利用者の継続利用に繋がった。

**キーワード:** 認知症カフェ、大学、地域、連携協働、成果

**Key Words:** Dementia café, university, community, collaboration/cooperation, achievement

## I. はじめに

わが国の高齢者人口は2017（平成29）年現在3514万人であり、高齢化率は27.7%である（内閣府，2018）。人口の高齢化は特に後期高齢者の増加において顕著であり、加齢とともに認知症の発症率が高くなる。現在、65歳以上の高齢者の認知症患者は462万人と推計され、有病率は16%

であるが、85歳以上では27%に達するという（内閣府，2018）。今後の推計患者数は、2025年には約700万人、有病率は25%になることが見込まれている（厚生労働省，2017）。

このような認知症の方の生活の場を示す調査によると、半数が自宅で生活していると報告されている（厚生労働省，2017）。認知症施策の重要課題として、2015年（平成27年）、厚生労働省が示

した認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～（新オレンジプラン）では、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域環境で自分らしく暮らし続けることを目指して新たな視点に立脚した施策を示しており（厚生労働省、2016）、その中で、認知症の人やその家族が地域住民や保健医療福祉の専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う「認知症カフェ等の設置」を推進し、認知症介護者の負担軽減を図るといった施策が謳われている。このプランを受けて、2013年以降、認知症カフェの普及が進められた。

認知症カフェの発祥はヨーロッパであり、2000年以降日本に紹介されたが、海外ではそれぞれの文化的背景の中で実践されており、わが国においても今後、認知症カフェの発展性が示唆されている（細川ら、2017）。しかしながら、日本における認知症カフェの歴史は浅く、運営に関わる効果やその実態を示した研究は僅かである。先行研究では、実践報告（島岡ら、2015；長谷川ら、2016）やカフェの運営に関するアクションリサーチ研究（徳野ら、2016；家根ら、2015；佐藤ら、2016）がみられる。結果から示された認知症カフェの実態または効果を見ると、カフェ利用による認知症の方の楽しみの増加や認知症の進行を予防する可能性、利用者相互の交流促進に繋がったことが示された。一方、利用者家族への心情や人生の回顧等、家族への効果を示した文献は1件のみであった（増井ら、2015）。また、全国規模の認知症カフェ実態に関する調査研究では、カフェ運営の主体は地域のボランティア団体や地域包括支援センターが半数以上を占め、単一法人や組織での実施が全体の8割強であると報告している。利用効果として、認知症の方は地域とのかかわりの機会の増加、情緒の安定、家族では地域での孤立や閉じこもり防止、介護負担感の防止、地域住民では認知症の理解と偏見の解消、専門職による多職種連携の実態について報告があった。このような効果の一方で、急激な発展のなかで運営上、いくつかの課題も見え始めている。地域運営者は、認知症カフェについて地域の理解が未だ乏しいと感じており、参加者数の不安定さからくる負

担感や不安感の増加、経済的、人的な不足等の意見を挙げている。また、特に2015年以降急激に増加し、多様化する認知症カフェの目的が見えにくく選択しにくい、情報が認知症の人に行き届いていない、さらに地域住民のイメージする「認知症カフェ」という名称への偏見から利用を敬遠するなど、閉鎖するカフェが散見されていることを挙げており、認知症カフェがさらに発展し継続するための課題を述べている（認知症介護研究・仙台センター、2017）。認知症は本人・家族ともにその発症に気づかない（加齢の影響ととらえる）、または認めたがらないことも多い。そのため、早期治療によりかなりの生活の質が長期間保たれるにもかかわらず、なんらかの生活のしづらさを抱えながらも放置しているといった、地域には多くの認知症高齢者が潜在し生活しており、早期に支援の手が届くことが望まれる。

既存の研究では地域のボランティア組織や福祉施設等、それぞれの運営主体別に認知症カフェ利用の実態や効果等が報告されていた。しかし、認知症を含む健康にかかわる知識の府である大学医療系学部と地域が協働開催する認知症カフェ利用の成果に言及した研究はみられない。大学と地域それぞれがもつ組織の特性を生かすことで相乗的な効果やそれぞれの組織への派生効果が見られるとしたら協働連携する意味は大きいものと考えられる。

そこで本研究では、A大学とB地区が協働で運営する「認知症カフェ」利用者へのグループインタビューを通して、相互の連携協働が認知症カフェ利用者にもたらす成果および継続的な運営に向けた課題を明らかにすることを目的とする。

## II. 認知症カフェ立ち上げに至るA大学とB地区との連携の経緯

本研究における認知症カフェの開催地であるB地区は都市部近郊に位置する郊外型住宅地であり、人口は10年間で約13%減少し、高齢化率は32%（2018年5月現在）で全国的、県・市全体からみても少子高齢化が顕著な地域である。また高齢化の影響は独居や認知症高齢者の増加にも顕れ、緊急な対策が必要とされる地域でもある。そ

のため、以前よりB地区は認知症高齢者対策への取り組みが活発に行われてきた。A大学は、B地区に位置しており、看護学・栄養学の学科をもつ医療系学部であり、各学科がもつ健康や栄養に関する知識や学生の若い活力を地域住民に活用すべく、地域貢献を積極的に取り入れてきた経緯がある。今回、地域住民や医療福祉の専門家との協働連携といった形式で認知症カフェの開催を実現するため、数回の合同企画会議を通して2017年10月開催に至った。

認知症カフェの特徴を表1に示した。カフェの目的は地域の軽度認知症の方や認知症への不安がある方およびその家族が、カフェへの参加を通して、①「楽しむ」、認知症に関する知識を②「学ぶ」、専門職への③「相談ができる」といった地域の居場所づくりを目指した。カフェの開催場所は、地域住民の多様な活動の拠点である交流施設とした。この場所は、2013年当該地区が県の公募事業として「安心安全まちづくり」のモデル事業に採択された際、地域の活動拠点として置かれた場である。事業が終了した後も引き続き地域住民によって継続運営されており、地域住民の拠点として安心できるなじみの場であることから選定した。

### III. 研究方法

#### 1. 研究デザイン

グループインタビュー法を用いた質的記述的研究デザイン

#### 2. 研究協力者

A大学と連携するB地区で展開する認知症カフェの継続利用者である。調査対象者は、以下の①～④を選定条件とした。①大学と地域が開催する認知症カフェの継続利用者（5回程度の参加がある）、②調査目的や方法を概ね理解し、グループインタビューに回答できる方、③40分～60分程度の質問に受け答えができる健康状態の方、④判断能力が低下している方は、調査にあたり家族からの同意が得られた方とした。対象者の募集は、カフェ実施日の終了後、研究の同意を得るため、研究の趣旨、方法、インタビュー実施日等を説明したのち、同意の得られた方6名を対象とした。対象の選定にあたり、選定条件に合致しているか否かは地域の民生委員から情報を得たのち決定した。

#### 3. データ収集方法

調査は2018年5月に実施した。グループイン

表1 大学と地域住民が開催する「認知症カフェ」の特徴

開催趣旨	①誰もが地域で楽しむ場 ②認知症について学ぶ場 ③認知症に関する相談の場	
開催日時	毎月第一土曜日 14:00～16:00	変更有
対象者	軽度認知症の方、認知症への不安がある方、その家族	
年齢	概ね75歳以上	
定員	15名	最大20名
開催場所	B地区の活動拠点である交流施設	
費用	1回200円(飲み物・お菓子付き・使用アクティビティ物品含む)	
スタッフ構成	医療系大学教員、大学生ボランティア、地域住民 近隣病院スタッフ、民生委員、地域包括支援センター職員ほか	
主なプログラム	月替わりとする ジャンル① 講義形式：認知症に関する講話、健康教育、栄養教育、 ジャンル② アクティビティ(創作活動・楽器演奏・合唱)、体操各種	大学と地域の 輪番制

タビューは、インタビューを受ける者同士の相互作用により自分たちの持っている考えや感情を発見できるという利点がある (Holloway, 2002)。本研究では大学と地域が連携したことで示された成果を明らかにするため、インタビューの対象者同士の相互作用によって気づき、表現できることをねらいとしてグループインタビューを採用した。

研究への同意が得られた6名によってグループを形成し、約60分のインタビューを実施した。調査場所は、プライバシーが保てる閉店時の認知症カフェとした。また面接時は許可を得て、ICレコーダーを使用した。

#### 4. 実施方法

調査の手順として、研究協力者に対して、カフェ終了後、本研究の目的と方法について説明し、同意を得た。インタビューの時間は60分であった。

グループインタビューにあたり、研究者2名で司会（ファシリテーター）と記録・録音係を分担した。インタビュー内容全体をデータとするため、許可を得てICレコーダーと筆記を行った。研究者はグループメンバーに対しては毎回認知症カフェにてなじみの関係にあり、緊張せず、自由に話す雰囲気づくりを心掛けた。質問はインタビューガイドにそって投げかけ、討議形式で自由に発言してもらった。インタビューにあたり、研究協力者のプライバシーを保護するため、実名を伏せ、参加者はアルファベットにて相互に対応するよう依頼した。インタビューの内容は、①認知症カフェ利用の経緯、継続利用の理由、②地域と大学が連携する認知症カフェの運営で感じるそれぞれの良さ、③認知症に対する意識や予防対策、④今後への期待などをできる限り自由に話せるよう配慮した。

#### 5. 分析方法

インタビューの内容から逐語録を作成し、記述データから認知症カフェが利用者にもたらす成果と把握できた文脈をA大学の要因とB地区の要因、さらに両者の連携から得られた要因に類別して抜き出し、データごとに分析を進めてコード化した。さらに抽象度をあげて、その意味を適切に

表現するサブカテゴリーを生成した。そして、サブカテゴリーの類似性と相違性に留意しながら整理し、最終的に認知症カフェが利用者にもたらす成果に対するカテゴリー化を図った。分析結果やカテゴリー名については研究者間で複数回検討し合い、信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### 6. 倫理的配慮

認知症カフェ開催日に研究の趣旨や方法について口頭および書面にて説明した。即ち、参加は自由であり参加の辞退や撤回により不利益を被ることがないこと、個人情報の守秘方法等について説明し同意を得た。記録は承諾を得てICレコーダーに録音し個人が特定できないように記号化した。高齢者への説明は平素な言葉を使い、簡潔に説明した。インタビューにあたり高齢者の集中力が途切れたり、疲労感がみられた場合は面接を一時中断した。データは研究終了後一定期間厳重に保管し、その後縦断的研究で用いるデータ以外は破棄すること、研究結果の発表の際には対象の匿名性、秘密の保持などプライバシーを厳守することを約束した。本研究は淑徳大学看護栄養学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。（承認番号第17-05）

### IV. 結果

#### 1. 研究協力者の概要

協力者である対象の概要を表2に示した。性別は全員女性であり、平均年齢は81.2歳、認知症罹患者はいなかったが、全員認知症への不安がある方であった。介護保険認定者3名、非認定者3名であった。

#### 2. 大学と地域の協働開催が利用者にもたらした成果

分析の結果、35のコードから、11サブカテゴリーを生成し、さらに5つのカテゴリーを抽出し抽象度を高めた。認知症カフェ利用者に対して大学がもたらす成果として、【認知症の情報や予防の共有ができる場】【学生ボランティアとの異世代間交流を通じた自尊感情の高まり】、地域から得られた成果では、【安心・安全な地域の居場所】、大学と地域両者の協働開催がもたらす成果として

表2 研究協力者の概要

ID	年齢	性別	家族構成	住居形態	健康状態
A	70代	女	同居(2世帯)娘	自宅	良好
B	70代	女	同居 夫・息子	自宅	下肢関節症 要介護1
C	80代	女	独居	自宅	要支援2
D	80代	女	独居	自宅	歩行器使用
E	80代	女	独居	サービス付き高齢者 向け住居	要支援1
F	80代	女	独居	自宅	良好

の【連携がもたらす多彩なプログラム効果】、【継続利用を可能にする両者の連携と課題】であった。

カテゴリーとサブカテゴリー、コードおよび代表的データを以下に述べる。なお、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは [ ], 最小単位であるコードを〈 〉で示し、インタビュー中の代表的データは「斜字」で示した。

1) 大学が認知症カフェ利用者にもたらした成果

【認知症の情報や予防の共有ができる場】では、[認知症への危機感]のサブカテゴリーが生成された。すなわち、身の回りで発症した認知症の方の様子を目の当たりにした〈身近な人の認知症経験〉や大学教員から認知症に対する情報の伝達を受ける〈認知症の正しい知識を得る〉ことは、認知症への偏見やいたづらに認知症を怖がる必要のないことを学んでいた。

【学生ボランティアとの異世代間交流を通じた自尊感情の高まり】では、地域で開催される認知症カフェへの学生ボランティアの参画による[学生ボランティアへ自己の経験を伝承できる機会]が生成された。主体的に応募した学生ボランティアによる茶菓の接待や傾聴を通して、利用者は〈長い経験を積んだ人生の知の伝承〉ができることに満足していた。それは、日頃の生活における〈世代間の隔絶意識〉をもっていた。〈非日常的な世代間交流〉を通して〈生活への張り合い〉を感じていた。また学生との交流を通して[自尊心・存在価値の確認]ができていた。学生との会話を通して〈年をとっても必要とされている〉ことや〈今

の日本を作ったプライド〉といった自尊心を内在していた。Bさんは“私なんかの話を真剣に聞いてくれるから嬉しい。もうこの年になるとだれも聞いてくれなくなる。若者の役に立ちたい”と語っていた。さらに学生が自主的に時間を設けて〈自分たちのための奉仕〉をしてくれることに感銘を受けていた。

2) 地域が認知症カフェ利用者にもたらした成果

【安心・安全な地域の居場所】では、[行き場のない孤立感解消の場][自分が必要とされている場][地域で安心して自分らしく過ごせる場]の3サブカテゴリーが生成された。[行き場のない孤立感解消の場]は、利用者にとって高齢であるがゆえの身体・精神面の機能低下がもたらす〈活動範囲の狭まりからくる閉塞感〉と関連した。認知症カフェは身近な地域の居場所として〈数少ない居場所・活動の場〉〈顔見知りの人々と交流できる場〉〈一人暮らし・家庭内の孤立〉解消を与える存在であった。また、[自分が必要とされる場]は、〈信頼できる地域の人からの熱心な誘い〉〈自分を思っている誘い〉では地縁を生かした顔見知りの地域住民から受けた誘いからの継続利用であった。さらに、[地域で安心して自分らしく過ごせる場]では、地域のリーダーや民生委員、地域包括支援センター職員を通して〈信頼できる専門家の薦め〉といった安心感を与えていた。Dさんからは“安心ケアセンターの人が紹介してくれたの。今は詐欺が多いから、誘われても騙されるんじゃないかって思う”と述べた。利用に際しては〈警戒心なく過

ごせる場)であり、一方で近年の認知症カフェの社会的な認知の広がりから〈認知症カフェ名称の浸透〉があり、利用を躊躇することがなかった。

### 3) 地域と大学両者の協働運営が利用者にもたらした成果

【連携がもたらす多彩なプログラム効果】は、[大学と地域との相互の利点]として、保健・医療・福祉といった様々な職種の専門家によって毎回のプログラムに反映される〈大学教員・専門職から

得られる認知症の知識)によって、利用者は認知症に対する予防方法や対策など講義による具体的な知識を受けており〈誤った認知症の知識の是正〉ができていた、一方では、認知症に関する知識のみならず、地域の特性を生かした住民参加のアクティビティや楽器演奏・合唱など多種多様な〈連携による月ごとの異なるプログラム〉の提供からは、〈自宅で感じるができない非日常の場〉と感じていた。

表3 認知症カフェの成果に関するカテゴリー表

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	発言数	具体的文脈	
大学要因	1. 認知症の情報や予防の共有ができる場	認知症発症への危機感	6	とにかく物忘れが激しくて、今言ったことを忘れる。このまま呆けちゃうんじゃないかと心配。	
		認知症への危機感	身近な人の認知症経験	3	夫・友人が認知症になって、本当にまったく別人になって、おしっこもおむつに垂れ流して、ズボンからぶら下がっているって感じで。
			認知症に対する誤った恐怖感	3	認知症にだけはなりたくない。何もかも分からなくなって、下の世話もでしよって、皆がそうなるんだと思っていて……。
		認知症の正しい理解	認知症を正しく知ることの大切さ	1	先生の講義で、認知症は何もかも分からなくなるのでなくて、分かるように話せば普通と同じように生活することだってできるんだってことが分かりました。
	2. 学生ボランティアとの異世代間交流を通じた自尊心の高まり	学生ボランティアへ自己の経験を伝承できる機会	長い経験を積んだ人生の知の伝承	5	皆さん熱心に聞いてくれる。若い子が来てくれると楽しいです。もっと積極的になってほしい、娘のような感覚です。でも、年寄りのいうことも参考になることだってあると思いますよ。・昔があるから今があるんだからね。
			非日常的な世代間交流	5	若いお姉ちゃんたちがいっぱい来ますよね。なかなかそんな機会はないからもっと話していたい。
			世代間の隔絶意識	6	孫がいるんですけども、一緒に住んでいないともう寄り付かなくなって年寄りのいうことなんか何言ってんだかっていうことでしょうね。
			生活への張り合い	5	張り合いになる。若さをもらえる。
		自尊心・存在価値の確認	年をとっても必要とされている(存在価値)	4	私なんかの話を真剣に聞いてくれるから嬉しい。もうこの年になるとだれも聞いてくれなくなる。若者の役に立ちたい。
			今の日本を作ったプライド	3	昔があるから今があるんだから伝えていきたい。
自分たちのための奉仕			4	ただ、ほらね、もうお茶のおかわり(お願い)って言うと、はいはいと快く言ってくれる。	
地域要因	3. 安心・安全な地域の居場所	数少ない居場所・活動の場	4	やっぱりこういう集まりは楽しみで、一生懸命通っています。	
		行き場のない孤立感解消の場	活動範囲の狭まりからくる閉塞感	3	どこか行きたいと思っても、足が弱いからみんなと同じようにできない。
			顔見知りの方々と交流できる場	5	皆さんと仲良く話し合える場が一番私にとって大切。年とると行き場があまりない。
			家人の介護からの息抜きの場	1	要介護5の弟をみているそれは大変、ここの集まりが楽しみ。
	自分が必要とされている場	一人暮らし・家庭内の孤立	3	家へ帰れば、ほら、1人でしょう。話し相手もいなくて寂しいもんですよ本当に。	
		自分を思っの誘い	3	いろんな人がいて楽しいから、家にいてもすることながら、絶対行った方がいいわよ。	
		信頼できる人からの熱心な薦め	6	遠くの家族より近くの他人よ。〇〇さんから言われたら(進められたら)行かなければと思う。	
		必要とされている喜び	5	ここへ来るとみんなが「この前こなかったからどうしたのかと心配だった、待ってたのよってしてくれるから有難い」。	

		地域で安心し自分らしく過ごせる場	信頼できる専門家の薦め	4	安心ケアセンターの人が紹介してくれた。今は詐欺が多いから簡単に言われてもね、騙されるんじゃないかって思っちゃう。
			地域のリーダーへの信頼	5	〇〇さんが行ってみたらと言ってくれた。リーダーシップをとってくれる人がいるから、行かなくては思ってしまう。
			認知症カフェ名称の浸透(周知)	3	殆ど、どこのテレビを見ていても、いろんな地域で、なんとかカフェ、なんとかカフェって老人が集まって、いろいろなことやっているから知っている。
			警戒心なく過ごせる場	6	今は詐欺が流行っていて心配で、ここは知っている人ばかりだから心配ない。
大学と地域相互の要因	4. 連携がもたらす多彩なプログラム効果	大学と地域との相互の利点	大学教員・専門職から得られる認知症の知識	2	こうやっているいろいろなことを勉強できて、認知症は頭と体使って予防が大事なことが分かった。
			誤った認知症の知識の是正(徘徊、失禁、性格の変化)	3	認知症になったらおしまいだと思っていた。だって、知り合いはおむつぶらさげているんだもの、みんなそうだと思っていた。でもこの前の講義でそうじゃなくて必ずそうなるんじゃないことが分かった。
			大学教員、学生、地域住民、専門家による月ごとの異なるプログラム提供	4	毎月いろいろ考えてくれて楽しい。どんなことでもいいの認知症のことは何回聞いてもためになるし。
			参加型プログラム効果	5	歌や楽器演奏はいいわね。歌なんかは参加の人たちと一体感がある。
	5. 継続的運営を可能にする両者の連携と課題	“楽しむ、学ぶ、相談する”を具現化する場	楽しむ、認知症を学ぶ、両者を兼ね備えた場	4	来れば必ず楽しいから満足です。病気や認知症のことも勉強になるし。
			自宅では味わえない非日常の場	5	一人で家にいてもぼーとテレビみているだけだし、ここは全然雰囲気の違い。ここに来るとしゃんとしなきゃと思う。
		継続的運営が可能となる両者の連携効果	負担にならない利用料	6	(年金暮らしで) お金もかかると(利用は) 私は無理だし。
			徒歩圏内にある通いやすさ	6	この年になると遠くには一人で行けないから近くにがあると助かる。
			気さくな雰囲気のある行きやすさ	3	地域の人もあるし、ここに来ると知り合いもいるし気心がしれているからいいと思う。
		継続的運営の課題	食事の提供がない	2	お菓子はそれほど望まないけど、美味しい食事を皆さんと頂けるともったいいい。
			性格や健康障害で誘っても利用しない人の存在	5	引きこもっている人に誘っているけれど、どうしても出てこない、みんなと楽しく過ごせばいいのにと思うけど、大勢の人と一緒に嫌がる人がいる。
			新規の来客が見込めない狭環境	6	もっと大勢来れると良いと思うけど、ここは狭いし、これ以上人が来たら私たちが来られなくなるから困るし。

【継続的運営を可能にする両者の連携と課題】からは「楽しむ、学ぶ、相談する、を具現化する場」として、地域と大学相互の利点を生かした〈楽しめる、学べる場〉であり、かつ、その場が〈徒歩圏内にある〉〈気さくな雰囲気〉が継続可能な場として利用されていた。[継続利用が可能となる両者の連携効果]では、経済的に〈負担にならない利用料〉〈気軽に身近な場〉が述べられた。最後に今後の「継続的運営の課題」として、交流のなかで〈食事の提供がない〉近隣の人々への声掛けに対する〈性格や健康障害で誘っても利用しない人の存在〉があることや実施するカフェの環境から〈新規の来客が見込めない狭環境〉は利用者の固定に繋がっていたことが示された。

## V. 考察

大学と地域住民が運営する「認知症カフェ」利用者へのグループインタビューを通して、両者の連携協働が認知症カフェ利用者にもたらす成果および今後の継続に向けた課題を明らかにするため6名の継続利用者に対しグループインタビューを試みた。既存の研究では、単一の組織や法人から示されたカフェの実態や効果を示した研究はいくつかみられたものの、本研究では大学と地域が連携協働することによりそれぞれのもつ利点が相乗的に作用し、カフェ利用者に与える成果として新たな知見を示せるものと考えた。結果を踏まえ以下に考察する。

## 1. 大学と地域が連携する認知症カフェ運営の意味

まず、大学と地域の連携協働から得られた成果として、利用者に対して、毎回【多彩なプログラム（効果）】として提供できたことである。認知症カフェの運営においては、カフェのコンセプトである、利用者がカフェにおいて「学ぶ、楽しむ、相談する」を具現化できたことが利用者の満足に繋がったと考える。つまり、“学ぶ・相談する”においては、医療系学部としての大学がもてる認知症をはじめとする高齢者にとって必要な健康教育・疾病予防や栄養に関する豊富な知識を伝達することで、認知症への誤った知識や、「認知症になったらもうおしまい」といった偏見を是正へと導いたと考える。住み慣れた地域で認知症者が生活できるためには、認知症への正しい知識をもった地域住民の対応が今後の地域力と繋がるものであり、高齢者一人一人の認知症に対する意識の変革が必要であると考え。一方で、月毎の輪番制として地域が担当するプログラムからは、地域住民のもつ多彩な特性を生かした“楽しむ”を主とした楽器演奏や合唱、健康体操、創作活動などのアクティビティの提供ができたことによるものと考えられる。大学と地域がそれぞれのノウハウを生かし、メリハリのあるプログラムの提供により、利用者にとって【継続的運営を可能にする両者の連携と課題】に繋がったと考える。

さらに今回、最も利用者の意見を反映したカテゴリーとして、認知症カフェへの学生ボランティアの参画であった。学生の心づくしの茶菓の接待や傾聴を通した異世代間交流は、利用高齢者の高い満足度に繋がった。高齢者は身体面・精神面において衰退するものの、各々が育った時代への伝承意識や自尊心は高く、認知症カフェにおける意図的な場の設定は効果的であった。利用高齢者は、近年の核家族化の影響によって若い世代との接点が殆どなく、一方、学生もまた高齢者と接する機会が殆どなかった。利用者らは学生の参画を心より歓迎し、自分たちの話を熱心に傾聴する学生に対し、これまで培った経験値や育った時代背景を話し聞かせることに嬉々としていた。若い世代に受け入れられるということは時代の伝承のみならず、現在自分が存在している意味を肯定する

ことに繋がっていたと考える。一方学生にとっては、地域住民、高齢者、軽度認知症者と交流する機会をもてたことで異世代の対象や認知症者への理解が高まり、高齢者に対する尊厳の思いをもつ機会となったこと、さらに地域の人々と関わることで地域貢献のもつ重要性を認識ができたことは教育的効果の高まりに繋がったと考える。他方、認知症カフェのボランティアだけでなく、地域の行事等に関わる他の地域活動やボランティア活動に繋げることができる可能性の広がりがあると考えられる。その意味では認知症カフェは地域福祉推進のための拠点となる可能性も秘めており、大学教育の一環としての役割を果たすことに繋がっていると考えられる。近年、大学教職員や学生のもつ社会貢献意識は低くなっているといわれる（長谷川ら、2016）。認知症カフェを地域と連携をはかることで教職員と学生両者の社会貢献活動への参加意欲の向上につながると考えられる。

次に、認知症カフェ利用者の高評価に繋がった要因として、カフェの開催場所との関連が示された。つまり、利用者にとって慣れ親しんだ地域の活動拠点での開催という点である。地域の顔見知りの人々の存在、信頼できる人からの紹介など、認知症カフェが地域の居場所として、活動範囲の狭まっている高齢者にとっては徒歩圏内にあることは重要なことである。自分たちにとって利便性がある【安心・安全な地域の居場所】であったことが利用者の継続利用に繋がったと考える。開催場所については、大学が主催であった場合、大学内を会場として実施することが多く、その場合、地域住民にとっては馴染みがなく“敷居の高さ”を感じる人も多いのではないかと考えられる。それは特に超高齢者ほど顕著であると考え。長谷川ら（2016）は、大学主催の認知症カフェ運営について、「参加者が十分に得られない現状について、情報資源、発信源として十分とはいえないことが原因である」と述べており、本研究における認知症カフェの運営において、開催場所が地域の活動拠点であることや地域住民の働きかけによって認知症カフェ開催への情報発信が可能であったこと点が継続利用と関連していたと考える。

## 2. 今後の継続運営における課題と将来的展望

大学と地域が連携する認知症カフェの運営の課題として、まず、本認知症カフェは定員15名と少ないことから毎回の利用者が固定化される傾向にある。つまり新規利用者の呼び込みが難しいという点である。通常、街のカフェであれば出入りは自由で時間的な制約はない気軽さをもつが、本認知症カフェは毎回テーマを設定したプログラムを展開している。よって、新規の参加者を少数しか呼び込むことができないといった制約がある。

次に今回インタビューの対象とならなかった、軽度認知症者の存在である。カフェのプログラムは毎回異なることから認知症に関する講話の回などは分かり易いことを心がけているが、軽度認知症者にとって認知症予防教育などの講話は好まれるものではないと考えられ、本人らのニーズにそぐわない状況である。認知症カフェの対象である方々の認知機能のレベルの相違、つまり、認知症罹患の有無によってプログラム内容を考慮する必要がある。認知症予防の知識伝達に関する講話をプログラムに盛り込む時点で軽度認知症罹患の方を対象としていなかったという反省点もあり、講話については、症状の安定を図るうえでの工夫などをわかりやすく講話に盛り込む、また認知症予防については対象を別枠で設定するなど、プログラム内容の検討が必要であると考えられる。

最後に認知症カフェの対象とされる方でも勧誘に拒否的な方の存在がある。地域で閉じこもりがちな人は認知症発症のリスクが高くなることから、このような方こそ利用の必要性が高い。今後どのような働きかけをすることで利用が可能となるか地域と検討を要する課題でもある。

本研究では大学と地域で協働する認知症カフェの運営の成果を検証するうえで認知症カフェの利用者グループインタビューを試みた。しかし、調査対象が認知症に不安を持つ方のみとなったため、カフェを利用されている軽度認知症の方の意見は反映できていないため、利用者全体の意見を反映できておらず、その意味では対象者の偏りがある。また調査人数も6名で1回みの調査であるため、今回の結果だけで一般化するにはデータが十分とはいえないことが研究の限界である。

## VI. 結論

大学と地域住民が連携する「認知症カフェ」利用者へのインタビューを通して、その成果および継続に向けた課題を分析した。その結果、35のコードから、11サブカテゴリーが生成され、さらに5つのカテゴリーとして、【認知症の情報や予防の共有ができる場】【学生ボランティアとの異世代間交流を通じた自尊感情の高まり】【安心・安全な地域の居場所】【連携がもたらす多彩なプログラム効果】【継続利用を可能にする両者の連携と課題】を生成した。

得られた知見として、連携協働による成果では、“学ぶ・相談する”において、医療系学部としての大学がもつ認知症に関する豊富な知識の伝達であり、一方、地域住民のもつ特性を生かした“楽しむ”を主としたアクティビティの提供ができたことにより、大学・地域相互のもつ利点を結集できたことが利用者のニーズと合致し、認知症カフェの成果と繋がった。さらに、学生ボランティアの参画は利用高齢者にとって高評価を得た。学生の接待や傾聴を通じた異世代間交流は、利用高齢者、学生とも異なる世代との関係が希薄であることから利用高齢者の自尊感情の高まりに繋がった。また、利用の継続要因として、開催地との関連が示された。利用者にとって慣れ親しんだ顔見知りの人々の存在、信頼できる人からの紹介など、認知症カフェが地域の居場所として、活動範囲の狭まっている高齢者にとっては徒歩圏内にあることは重要なことであり利便性がある安心・安全な地域の居場所であったことが利用者の継続利用に繋がったことが示された。今後の課題として、認知症予備軍である閉じこもり高齢者の呼び込みや認知機能のレベルの違いがある利用者へのプログラムの検討が必要である。

## VII. 謝辞

本研究をすすめるに当たり、インタビュー調査に快くご協力頂いた認知症カフェ利用高齢者の皆様に心より感謝申し上げます。

尚、本研究は、平成29年度淑徳大学研究推進事業並びに平成30年度日本認知症ケア学会地域

活動支援事業の助成を受けて実施した。

## VIII. 利益相反

本研究において記載すべき利益相反は存在しない。

### 文献

- 安梅勅江 (2003) 『ヒューマン・サービスにおけるグループインタビュー法－科学的根拠に基づく質的研究法の展開』 医歯薬出版。
- 長谷川真美, 佐藤光栄, 柿沼直美, 他 (2016). 看護大学で行う認知症カフェの成果と課題－学生参加と大学の社会貢献の視点から－. 東都医療大学紀要. 6 (1). 49-56.
- 細川淳嗣, 西田征治, 國定美香, 他 (2017). 「日本・ドイツ・中国の認知症高齢者の実態と施策の国際調査」. 人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌 (1346-3217), 17 (1) 73-82.
- 市川勝, 佐藤隼, 井戸和宏 (2015). 「認知症になっても安心して暮らせる街づくり」における言語聴覚士の役割 (第2報). 相模原市における認知症カフェ普及に向けた取り組み]. 言語聴覚研究 (1349-5828), 12 (3) 199.
- 家根明子, 小野塚元子, 廣川聖子, 他 (2015). 認知症者支援 専門職にとっての認知症カフェの持つ意義と課題. 奈良学園大学紀要, 2 : 113-118.
- Immy Holloway (2002). stephanie Wheeler: Qualitative Research in Nursing. 2nd edition, Blackwell Publish Company, UK 111.
- 角マリ子, 多久島寛孝 (2017). 認知症カフェおよびサロンにおける認知症者とその家族支援についての文献的考察. Journal of Kumamoto Health Science University No.15: 109-120.
- 木村大介, 武田徳則, 太田崇 (2011). 「憩いのサロン」事業参加高齢者における軽度認知機能障害 (MCI) 該当者の割合. OTジャーナル, 45 (9) 1087-1091.
- 木村典子 (2015). 「地域住民の認知症高齢者に対する認識 認知症カフェを行うための事前ニーズ調査 (その1)」。老年社会科学 (0388-2446), 37 (2) 198.
- 厚生労働省 (2016): 「認知症施策推進総合戦略 (新オレンジプラン) ～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」. ([http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000./nop1-2\\_3.pdf](http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000./nop1-2_3.pdf), 2017年8月17日アクセス).
- 厚生労働省 (2017): 「介護保険サービスにおける認知症高齢者へのサービス提供に関する実態調査事業」 (<http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000./0000097554.pdf>. 2018年9月31日アクセス).
- 認知症介護研究・研修仙台センター (2017). 認知症カフェの実態に関する調査研究事業報告書, 認知症介護研究・研修仙台センター. 1-129.
- 増井玲子, 佐藤友美, 吉田留美, 他 (2015): 認知症の人を介護する家族支援としての認知症カフェの意義. 認知症ケア事例ジャーナル, 8 (3) 209-218.
- 内閣府 (2017): 高齢社会白書 (平成30年度版). ([https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl\\_1\\_1\\_1.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/zenbun/sl_1_1_1.html). 2018年11月25日アクセス).
- 島岡昌代, 山崎尚美, 南部登志江, ほか (2015). 「認知症カフェに関する実践報告」. 畿央大学紀要 (1349-5534), 12 (2) 53-57.
- 佐藤友美, 吉田留美, 中西敏子, ほか (2016). 施設入所中の若年性認知症の人が認知症カフェに外出することの有効性の検討. 日本認知症ケア学会誌, 15 (2) : 513-521.
- 田岡勝洋, 松本早紀, 三木尚美, 他: 高槻北地域包括支援センターにおける「認知症カフェ」の立ち上げ. 愛仁会医学研究誌, 45 : 239-240, 2014
- 徳野圭昭 (至誠会介護老人保健施設健寿荘), 吉田留美, 増井玲子, ほか: 「在宅認知症高齢者を支援して訪問リハビリテーションとオレンジカフェ由布での支援」. 大分県リハビリテーション医学会誌, 13巻 : 34-37 (2015).

## Abstract

The principal aim of the present study was to clarify the outcome of and issues related to the continuation of a “dementia café” operated through cooperation between A University and local residents. A group interview was conducted for six dementia café consecutive users and qualitatively analyzed. Based on the analysis results, 5 categories and 10 sub-categories were extracted from 35 codes. The 5 categories were: “A place where information on dementia and prevention can be shared,” “Enhancement of self-esteem through intergenerational exchange with student volunteers,” “A place in the local community to feel safe and secure,” “Various program effects brought about by cooperation,” and “Collaboration between the two that enable continuous use and related issues.”

Regarding the achievement of collaboration/cooperation, the university could provide knowledge concerning dementia to residents. Moreover, the fact that we could conduct activities that focused on “enjoyment” ensured that the achievements of users were linked to the specific characteristics of the community. In addition, student volunteers who participated in the dementia café gave high evaluations regarding their experiences. The intergenerational exchanges between students and users increased the self-esteem of the users. The characteristics of the venue were found to be factors that contribute to continuation of utilization. For elderly persons, it is important that the facility is located within walking distance, and the facility’s convenience, safety, and security in the local community were associated with continued use by users. Based on the present results, it will be necessary in the future to consider programs to attract withdrawn elderly persons with pre-dementia and users with different levels of cognitive functioning.